



第 36 回日本国際保健医療学会学術大会

シンポジウム報告書

「顧みられない熱帯病に関するキガリ宣言と日本の対応」

主催：日本顧みられない熱帯病アライアンス（JAGntd）

後援：SDGs・プロミス・ジャパン（SPJ）

2022 年 4 月 19 日

目次

1. この報告書について	3
2. シンポジウムの概要	4
2.1. 背景と目的	4
2.2. 登壇者紹介	5
2.3. プログラム	6
3. シンポジウムの要点	6
3.1. 座長挨拶、議題の提示（平山）	6
3.2. シンポジスト発表（江副）	7
3.3. シンポジスト発表（菅原）	7
3.4. シンポジスト発表（稲場）	8
3.5. シンポジスト発表（伊藤）	8
3.6. 質疑応答	9
4. まとめ～JAGntd に期待されている役割	11



日本顧みられない熱帯病アライアンス

(Japan Alliance for Global Neglected Tropical Diseases: JAGntd)

JAGntd は、日本の「顧みられない熱帯病 (Neglected Tropical Diseases: NTDs) 制圧活動への参画を促進するため、国内外の NTDs に関わる団体、企業、個人を結び、相互の情報交換を行うネットワークです。NTDs 分野における日本の貢献を可視化、合理化、拡大を通じて NTDs 制圧に貢献することが JAGntd のミッションです。長崎大学熱帯医学研究所が事務局を運営しています。

1. この報告書について

本報告書は、2021 年 11 月 28 日に実施された第 36 回日本国際保健医療学会学術大会のシンポジウム「顧みられない熱帯病に関するキガリ宣言と日本の対応」（主催：日本顧みられない熱帯病アライアンス、後援：SDGs・プロミス・ジャパン）の要点をまとめたものです。

シンポジウムには、日本のグローバルヘルス政策に造詣の深い 4 名のパネリストを招き、コロナ禍における日本のグローバルヘルス政策に顧みられない熱帯病（Neglected Tropical Diseases：NTDs）対策を位置づけていくために何ができるかを議論しました。とりわけ、2022 年には NTDs のためのグローバルパートナーシップ宣言（通称、キガリ宣言）が取りまとめられる予定で、日本も先進国としての役割を果たすことが期待されています。

本報告書では、シンポジウムの背景や目的などの概要を示したあと、議論を通して表出した主要な論点をまとめます（紙面の都合上、シンポジウムで語られた内容を網羅するものではないことをお断りいたします）。シンポジウムにご協力いただいた関係者の皆様やパネリストの皆様にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。なお、本報告書で個人名を記載する場合は、すべて敬称略とさせていただきます。

昨今の新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、グローバルヘルスを取り巻く環境は大きく変わりつつあります。日本からの NTDs 対策への貢献が今後一層効果的なものになるよう、本報告書がそのお役に立てれば幸いです。

2. シンポジウムの概要

2.1. 背景と目的

顧みられない熱帯病（Neglected Tropical Diseases: NTDs）とは、オンコセルカ症や住血吸虫症など 20 の疾患群の総称です。開発途上国の貧困層を中心に全世界で 10 億人以上が少なくともひとつの NTDs に感染していると言われています。その対策は貧困から抜け出すために重要な公衆衛生上の課題とされ、国連の持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）にも含まれています。しかし、多くの疾患では未だに十分な対策が講じられず、さらなる国際的な努力が求められています。

2020 年のグローバルヘルス合同大会において JAGntd が開催したシンポジウム「顧みられない熱帯病：日本は次の 10 年の戦略を描けるか？」では、日本政府を中心とした NTDs 戦略の在り方について議論を深めました。この 2020 年のシンポジウムは、世界保健機関（World Health Organization: WHO）が 2030 年までの NTDs 対策ロードマップを発表したタイミングに合わせて実施されました。議論を通して、途上国における保健システム強化の経験を NTDs 医薬品のアクセス改善に活かせるのではないか、NTDs 医薬品へのアクセスを拡大するための財政基盤と供給体制の強化に取り組むべきではないか、という点が強調されました。

2020 年のシンポジウムの成果を踏まえ、本シンポジウムでは日本が今後どのように NTDs に貢献していくことができるか、引き続き議論しました。

2022 年には、NTDs の国際的パートナーシップ強化に向けた宣言（通称：キガリ宣言）が打ち出される予定です。この宣言は、NTDs 対策へのコミットメントを国際的に表明する 10 年に 1 度の機会となり、日本からも政府や企業など様々な関係者がこの宣言に賛同し、署名することが期待されています。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、グローバルヘルスを取り巻く環境は大きく変化しつつあります。日本政府のグローバルヘルス政策において NTDs 対策が重要課題としてみなされ、相応の予算的措置を受けられるかどうかは、極めて不透明な状況になっています。日本政府はユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（Universal Health Coverage: UHC）をグローバルヘルス戦略の中心テーマに据えており、NTDs がどのように UHC 達成に貢献するかという点も議論が求められています。

尚、本報告書におけるパネリストの意見は個人の見解であり、必ずしも所属組織・団体の意向を反映するものではありません。

2.2. 登壇者紹介

座長

平山 謙二

日本顧みられない熱帯病アライアンス（JAGntd） 運営委員長
長崎大学熱帯医学グローバルヘルス研究科 教授

パネリスト

江副 聡

外務省国際保健政策室 室長

菅原 丈二

（特活）日本医療政策機構 マネージャー

稲場 雅紀

（特活）アフリカ日本協議会 国際保健部門ディレクター

伊藤 聡子

（公財）日本国際交流センター 執行理事

（肩書きはシンポジウム当時）

菅原氏、稲場氏、伊藤氏は JAGntd アドバイザーであり、JAGntd の活動に対して日常的に助言をお願いしております。

2.3. プログラム

日時：2021 年 11 月 28 日（日） 9:00-10:30 (90 分)

9:00-9:10 座長挨拶、議題の提示（平山謙二）

9:10-10:00 パネリスト発表

外務省国際保健政策室 江副聡

日本医療政策機構 菅原丈二

アフリカ日本協議会 稲場雅紀

日本国際交流センター 伊藤聡子

10:00-10:35 討論および質疑応答

3. シンポジウムの要点

3.1. 座長挨拶、議題の提示（平山）

本日のテーマは、日本がウィズ・コロナの時代において、どのように NTDs 対策に貢献できるかを議論することです。とくに、2022 年には NTDs のグローバルパートナーシップ宣言「キガリ宣言」が出される予定となっており、日本からの一層の貢献が期待されています。このキガリ宣言は、2012 年に発表された「ロンドン宣言」の後継にあたるもので、WHO が策定した「NTDs road map 2021-2030」を実現させるのに必要な政治的意思やコミットメントを世界中から集めることを目的としています。

日本顧みられない熱帯病アライアンスでは、このキガリ宣言に合わせて日本政府が発表しうるコミットメントとして、以下の 5 点を提案してきました。

1. GHIT Fund への投資を拡大する
2. 政府開発援助（ODA）を使った NTDs 対策プロジェクトを増やす
3. 世界保健機関アフリカ地域事務局の NTDs 対策支援事業（ESPEN）への資金拠出および影響力を拡大する
4. NTDs 版「グローバルファンド」の設立に向けた動きをリードする
5. NTDs 対策に関わる市民社会団体への支援を増やす

これも踏まえ、本日まで登壇のみなさまには、以下の観点から議論を深めていただきたいと思います。

■ ウィズ・コロナの時代、日本はどのように NTDs 対策に貢献するのか？

- NTDs 対策における日本の役割、責任分担、途上国からの期待度
- 日本の国家としてのインセンティブは？
- 日本政府の新グローバルヘルス戦略をどのように NTDs に結び付けるのか？
- NTDs をレバレッジとしての UHC 達成を議論する具体的方策は？
- NTDs が政策アジェンダに入るもっともな理由は？

3.2. シンポジスト発表（江副）

私からは、グローバルヘルスの動向と日本政府の取り組みについてお話しします。我が国には、2015 年に定められた国際保健戦略「平和と健康のための基本指針」があります。これには、主な 2 本柱として、有事の対応（公衆衛生危機・災害に対する健康安全保障体制構築）と平時の対応（基礎的保健サービスの確立と UHC 達成）が含まれます

近年の国際保健外交は、「人間の安全保障」や「誰も取り残さない」という理念に基づいて進められています。とくに、グローバルヘルスの枠組み作りに力を入れており、G20、WHO 改革、新たな基金の設置、日米豪印との協調、コロナサミットなどを通して、今後新たに起こり得るパンデミックへの備えを強化しています。

日本政府のコロナ対応としては、現下の感染症危機の克服、将来に備える保健システムの強化、より幅広い分野での健康安全保障のための環境整備、が主要テーマになっています。

3.3. シンポジスト発表（菅原）

日本医療政策機構（HGPI）とは、外部専門家を集めて医療政策提言をする NPO です。研究成果を政策や政治的アクションにつなげるため、様々な関係者と連携しています。

現在、いわゆる“グローバルヘルス”の中に、コロナ、気候変動、薬剤耐性（AMR）など色々な要素が入ってきています。そのような中で、“グローバルヘルス”に割り当てられた資源の配分を NTDs に振り分けていくことは容易ではありません。また、地理的な要因によって疾病負荷の偏りがある NTDs の優先順位は他の疾患に比べて歴史的にも低く、国際保健の中心的なアジェンダとして取り上げられることはあまりありませんでした。

NTDs の影響を受ける、また影響を与えられるステークホルダーとして、学術機関、製薬会社、市民社会組織など様々な考えられますが、このうち日本にあって海外にないものや、日本にあるのに活用されていない資源を活用していく必要があります。

その際には、持続可能な開発目標（SDGs）における他の政策目標にも着目し、NTDs 対策や UHC 達成に対して直接的に貢献する活動だけではなく、間接的に NTDs 解決に結びつける SDGs の目標や分野と積極的・戦略的に連携し、その資源を増やしていくようなやり方も考え、声をあげていくことも重要だと思います。

3.4. シンポジスト発表（稲場）

私からは、市民社会の保健への取り組みという視座から、HIV/AIDS の経験を共有したうえで、NTDs 分野について考えてみたいと思います。

HIV/AIDS は、患者運動や社会運動が国際的な資源、資金の確保につながった好例といえます。その成功の背景には、HIV をそれ以外の事柄と絡めて運動を展開したことが指摘できます。例として、HIV と結核との複合感染、多剤耐性結核対策、ワクチンの各地域での製造能力強化に関する運動などとの共闘です。グローバルヘルスにおける資源配分には、疾病負担に比例して配分されるというような仕組みはありません。関係者の、ときにアグレッシブな活動を経て、決められてゆくものです。

NTDs に関する社会運動はまだ地味です。患者の多くが貧困層に偏っていることにより、患者が声をあげにくい状況があるのだと思います。このボトム層の声を拾い上げることで、資金調達につなげることを考えなければなりません。また、アメリカでは市民運動が重視される一方、日本のように市民運動が効果的でない社会もあります。そのため、国境を超えて市民運動を広げていくことが重要であるといえます。

3.5. シンポジスト発表（伊藤）

私からは、NTDs を日本の国際保健政策の優先課題とするために必要と思われる 6 つの視点を提示します。

1. 国益との関係を考えること。日本の経済成長に NTDs 対策がどのように関わるのか、日本に住む人の命と生活を守るのに NTDs 対策がどう関わっているのかを理由づける。
2. ジャパン・レlevance。NTDs を日本人が自分ごとにするような方法を考える。
3. UHC との関係性を明確に示す。NTDs 対策は UHC 達成にどのように貢献するのか、エビデンスが不足している。
4. 「非国家アクター」の参画を促す。日本ではアカデミアが NTDs のアドボカシーを主導している点が強みだが、当事者団体、NGO、シンクタンク、財団の関わりが少ないため、そこを強化していく必要がある。
5. グローバルヘルス全体への資金拡大を目指す。日本の ODA 総額のうち保健に配分される割合は、他国に比べて低い。NTDs に対する拠出を増やすためにも保健 ODA の拡大が重要
6. グローバルヘルスに関心を持ち、支持してくれる人々の層を広げ、民意を可視化する。

3.6. 質疑応答

【平山】 NTDs の政策形成において、民意や民間の声を反映させるにはどうしたらよいでしょうか？

【江副】 「保健分野の ODA のあり方について考える特別委員会」では様々な分野の関係者が参加し、その点で民意を反映し、ひいては政治にも反映できました。また、提言案を作る際も、市民社会の方との意見交換会を行いました。様々な機会に民間の声を吸い上げ、インプットをいただくことが大切と考えています。

予算獲得の際には「NTDs が日本にとっていかに重要であるか」を経済、外交的に説明できるかが問われます。新型コロナウイルスで国内においてお金を使うことが多くなっている今、日本のプレゼンスやリーダーシップを示すという理由は十分ではありません。どのように理由づけできるのかをエビデンスをもとに提言していく必要があります。現在は次のパンデミックのための準備に注目が集まっているので、NTDs 対策に投資することがパンデミック準備に対してどのように貢献するか示すことも重要です。

【平山】 NTDs 対策の重要性をどのように説明するべきでしょうか？

【菅原】 3つあります。

1つ目は、NTDs と今回のコロナ対策との関係性をエビデンスに基いて説明する必要があると思います。NTDs 対策として整備されていた病院や研究所などが、今回のコロナでどのようなインパクトを残したのか、救われた患者数など数字で明確に説明することが重要だと思います。

2つ目は、気候変動やワンヘルス・アプローチといったアジェンダとともに議論をしていくことが求められます。人間および動植物・環境などの影響について横断的に議論が進んでいるワンヘルス・アプローチは、サイレント・パンデミックやネクスト・パンデミックとも言われている薬剤耐性（AMR）対策の重要なテーマとなっており、そこに NTDs と関連する要素を盛り込んでいくことも可能だと思います。

3つ目は、NTDs 対策を進めることによって課題解決のために相互的な影響がある分野を、保健医療に限定せず、アカデミアが示していくことです。これにより間接的ではあるかもしれませんが、NTDs 対策を進めるために必要な資源・予算を集めることができるかもしれません。

【平山】 例えば、日本がこれまで JICA などの ODA や SATREPS などを通してガーナ大学野口記念医学研究所に行ってきた長年にわたるインフラ整備事業が、今回のパンデミック対策にいかに大きな貢献をしたのか、データとして示す必要がありますね。

【菅原】 JAGntd としては、NTDs 対策が SDG の他の項目に対する貢献になることを説明し、日本の市民社会団体がフィールドで実施している、例えば、教育、水・衛生、インフラ投資などの活動に NTDs への評価も組み込んでもらうよう働きかけることも考えられます。そのためには、国内外の大学の協力や学際的な取り組みも重要となると思います。

【視聴者からの質問】 HIV と異なり、NTDs 感染者の多くは貧困層で、なかなか社会運動に繋がらない、声をあげられない人が多い。どのような工夫ができるでしょうか？

【稲場】 確かに HIV は先進国に罹患者が多いため治療薬の開発が非常に早いという面があります。一方で罹患者のなかには、LGBTQ など、先進国の中でも社会的立場が弱い人が多く、NTDs 対策もそこから学べるのではないのでしょうか。「サバルタン（編注：支配権力構造から社会的、政治的、地理的に疎外された人々をさす）」という観点が、NTDs に関わる運動の分析や戦略構築に必要です。途上国においても、地方に住む人々は我々と社会認識が大きく違います。即戦力としては、途上国の市民社会団体や研究者の声をどのように NTDs 運動に導入するかが大切です。このような意見の拾い上げの作業にきちんと資源を割き、政策担当の人たちにつないでいくことを考えるべきです。

【平山】 3大感染症を手掛けるグローバルファンドへの支援だけでも規模が大きいなか、さらに NTD はもっと大変なのではとも感じるが、どのような切り口が考えられるでしょうか？

【伊藤】 まずは、先ほどお示しした6点が大事だと思います。

日本の NTDs の利点は研究者の層が厚みをもっていることです。これを活かし、これまで行なってきた国際的な活動の成果を数字で示すのはどうでしょうか。グローバルファンドに関する最近の研究で注目されているのが、グローバルファンド事務局とは異なる第三者の研究者の立場からグローバルファンドの支援（過去5年間）を分析し、支援総額の3分の1が保健安全保障（health security）にも役立っていることを示した論文です。このような客観的なエビデンスは、政策提言を進めるうえで、有用です。

4. まとめ～JAGntd に期待されている役割

本シンポジウムでは、「ウィズ・コロナの時代、日本はどのように NTDs 対策に貢献するのか？」を中心テーマとして議論を進めました。シンポジウムを通して、具体策は提示されなかったものの、コロナ禍のグローバルヘルス分野において NTDs を優先課題として維持し続けることの厳しさが繰り返し指摘されました。そして、その困難を乗り越えるためのヒントもいくつか提示されました。そこで、本報告書のまとめとして、JAGntd が今後担いうる 2 つの役割について考察をします。

1 つ目は、政策研究を通してエビデンスの構築に寄与していくことです。日本がなぜ世界の NTDs 対策に関わる必要があるのか、それを経済、外交的に説明するための材料が求められています。国内の NTDs についてのエビデンスを出していくことも、NTDs を「日本の問題」として捉えなおすきっかけになるかもしれません。また、NTDs 対策が、UHC、保健システム強化、パンデミック対応といった上位の目標にどのように貢献しているのかを示すことも有効です。国内外で NTDs に感染している社会的弱者の声を、科学的エビデンスとして拾い上げることも考えられます。

2 つ目は、政府、企業、市民社会団体などとの連携を広げ、対話を深めていくことです。様々なアクターが対等な立場で対話をする場をつくり、そこに NTDs を超えた分野で活動しているアクターの参画を促すことが重要です。これは JAGntd 設立時のミッションと合致するものですが、本シンポジウムを通して、その重要性を再確認するに至りました。幸い、NTDs 分野での官産学民の連携を深めるためのプラットフォームとして、2021 年の日経 FT 感染症会議において、NTD 部会を立ち上げることが提言され、2022 年には部会活動を始める計画があります。このような場を通して対話を深め、日本の NTDs 対策を政策・戦略面で前進させることが期待されています。

第 36 回日本国際保健医療学会学術大会

シンポジウム報告書

「顧みられない熱帯病に関するキガリ宣言と日本の対応」

2022 年 4 月 19 日発行

発行者 日本顧みられない熱帯病アライアンス (JAGntd)

〒852-8523 長崎市坂本 1 丁目 12-4 長崎大学熱帯医学研究所内

URL: <https://jagntd.org/>

本書の全部または一部の無断転載を禁じます。